

田代三喜の察証弁治における刻と牛八の意義

鈴木 達彦

東京理科大学／北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

『三婦廻翁医書』中の『和極集』は田代三喜の察証弁治を伝えている。三喜の医学を専ら李朱医学と結びつけることもあるが、そこで繰り広げられる三喜独特の処方組み方は李朱医学の影響を考えただけでは到底理解できない。『和極集』における察証弁治は、まず患者の症状を挙げ、「刻＝〇〇湯トス」と処方名を記すことから始める。次いで「氣攻」、「血補」などの3～4の分類を行い、それぞれに2～4個の生薬を配する。時には加減方などを続け、最後には「牛八＝帰ス」と記す。形式だけを見るならば、処方名を記し、処方解析を含めて配合生薬を示した一般的なものと考えられなくもない。しかし、『和極集』においては同名処方であっても配合される生薬が全く異なる場合があり、形式が共通するからと言って通常の処方集と同義とはできない。さらに、処方名の始めの「刻」は、普通は生薬を刻んで細かくする意味で使われ、生薬を組み合わせる処方に用いるには不適切な表現のように思える。そして「牛八」に関しては全く意味が通じない。「牛八」についての見解は従来の研究にもあったが、始点である「刻」と終点である「牛八」との関連から考察されたものはない。本研究では「刻」と「牛八」の両者の意義を検討した。

名古屋の奈倉家に伝わる『酬医頓得』は薬師如来を中心とした仏教医学の影響がみられる三喜の医学を伝えた資料である。冒頭に「其療術者刻帰牛八」とあり、本書においても「刻」と「牛八」は重要視されている。また、本書には色分けされた五輪塔の図が見られ、本書が五輪碎の思想体系にあることを示している。五輪碎は色分けされた五輪塔や梵字の「阿」が、五行もしくは五大に碎かれて解体されていき、身体の様々な要素に展開していくという仏教医学的な身体観に基づいている。五輪碎の概念の中にある『酬医頓得』において「刻」と五蘊に関して次の記載がある。「色即是空空即是色、色受想行識之刻」。この記載から推察されることは、五輪碎において5つの要素に解体される「阿」と「刻」が深く関連付けられていることである。本書においてこのように「刻」が扱われることは、「刻」が細かく刻むことを意味することに加え、本書に書かれる「刻」の字体が梵字の「阿」字に酷似することから理解できる。つまり、「刻」は梵字の「阿」を象形的に翻訳したものと考えられる。三喜にとっては「刻」は細かく解体され得る「阿」と同義であるため、その察証弁治において「刻」が始点とされる。

「刻」を「阿」とする時、「牛八」の「八」は「口」のくずし字の形に近く、つまり「牛八」は「阿吽」の「吽」を意味するとみられる。『酬医頓得』では薬師如来のもとに至り、その徳によって治療のすべを得ることを説く。そこに至るには治療者と患者が以心伝心によって繋がり、両輪となって進む「牛八」でなければ為し得ないとしている。「牛八＝帰ス」で帰る所は薬師如来のもとであると考えられる。「吽」字の「口」を「八」に訳したのは、左右対称である「八」が治療者と患者で作る両輪を表していて、さらには、「牛八」と2字に分けることによって、両輪の車とそれを引く牛という牛車の形を表しているとも推察できよう。他方、『和極集』では「牛八＝帰ス」と「弁＝帰ス」がほぼ同義に扱われており、「弁」字も解体すると「牛八」に近くなるという報告もある。治療法に至る手段の一つとして「弁」が重視されたとも考えることもできる。

田代三喜は「刻」と「牛八」を「阿吽」として対に扱っており、「刻」から始まり、処方が各々の要素の生薬に解体されて「牛八」に至るという過程に治療の極意をみている。田代三喜の察証弁治は薬師如来への信仰のもと「阿吽」に自身の治療を委ねた仏教医学的な側面から導かれたものと考えられる。